
こいつとあいつと恋人理由

つかさ乃至

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こいつとあいつと恋人理由

【Nコード】

N5597J

【作者名】

つかさ乃至

【あらすじ】

男子として高校入学とあいなりました、本当は女の子、霧島梓キリシマズサが出会ったのは不良な男、崎村葵サキムラオイ、所謂イケメンな彼に早速梓は女の子とバレてしまいました。

【煙草は二十歳から】

うららかな春の陽気に誘われて芽吹き始めた桜の木、それは校門から校舎まで続く一本道を飾っていた、それを囲うようにして左右には庭園があり色とりどりの鮮やかな花で埋め尽くされている。

風が吹くと花と土の匂いが鼻を掠めたが、それは地上を歩いていれば、の話だ。

「……やってらんねえよ…」

ここ天馬学園高等部に新入生という新しい風が吹くと同時に、まるで城のような広く大きな校舎の屋上でぶつくさと不満を呟く者がいた。

真新しい制服は男子の物だ、それを身に包んだその者は屋上の手摺から腕を伸ばす、勿論そのまま逆さまに落ちないよう足は手摺に引っかけてあった。

「あー…マジで何なんだよ…ふざけんじゃねーよ…」

身長は165センチ、長い黒髪は1つに束ねてあり背筋の良い背中ですらりさらりと揺れている。

その日本人形のような顔立ちに男子生徒までもが足を止めて目をハートにしてしまう始末、そんな彼はただただ落胆していた。

「はああああ…有り得ません…こんなん許せましえん…」

深い深いため息を吐いてから彼はクルリと回って手摺に背中を当てると凭れかかり、だらんと下げた頭をゆっくりと上げて空を見上げた。

青空に浮かんだ雲が風に流されて、形をふにゃふにゃと変えていく。

「……………て、ん？あれ？今何か…良からぬ物を見てしまったような…」

彼は目を細めて空をじーっと見つめた、頭を上げた瞬間、屋上の出入口が視界に入ったのだ。

「嫌な予感が…」

悶々としながら、漂う柔和な空気は無理矢理落ち着きを取り戻すと、彼はもう一度出入口を見た、その平らな屋根の上に足を投げ出して座る男がいた。

「……………フウ…」

切れ長の瞳に形の良い顎と高い鼻、まさに眉目秀丽もしくは容姿端麗、そう思わず息を飲むほどの美男子の口から煙が立ち上っている。

「……………ツツツ!？」

ギョツとする彼に対して、煙草タバコを吸う男は動じない。

「…あーバレちゃった…♪」

ケラケラ笑って、全く悪びれる様子は一切も無く、男はジャケット

の内ポケットに手を入れて携帯灰皿を取り出した。

「バレ：てか普通隠れたりするんじゃないか！？なにっそんなアツサリ見つかったちゃってんの！？俺が先生だったらどうすんだ！！」

「：うわっテンション高えなー新入生：」

落ち着いた雰囲気の方は、ジュッと煙草の火を消すと内ポケットに灰皿を仕舞い直した。

「：なったんで新入生って：知って：」

「ネクタイ、赤チェック」

彼の胸元に指を差しながら方は灰色のズボンからまたしても煙草を取り出して、口に一本くわえた。

「：って：また煙草！？」

「：ふはっ：ダメ？」

首を傾げてにっこりと笑う方の顔はどこか気品があり、「綺麗だ」と声にしてしまいそうなほどだったが、彼はぐっと我慢した。

「：だっために決まってる！俺達はまだ高校生だぞ！：ってか、お前：」

怒鳴る彼の目に入っただのは男のネクタイの色だ、赤チェック、である。

「同じ年かよっつっ!!」

「…みたいだね？」

再びにつこり、と笑う男は煙草を軽く噛むと「んっ!」と声を出してその場から飛び降りた。

「なっなんだよ!」

「そんな睨むなよ」

近付く男に彼は後退するが後ろは手摺、下がるにも下がれない。

スラリとした体型に180はありそうな長身、さっきも見下ろされていたが、結局見下ろされている。

「自己紹介すんのに、見下ろすのは失礼、かなあと…」

「……自己紹介？」

「そ、俺は、サキムラ アオイ崎村葵…お前名前は？」

ふっと微笑む葵の顔に何かご飯粒でもくっ付いているかのように彼はじっと見つめた、というより見蕩れてしまった。

「んだよ…俺の顔に何か付いてますかあ？」

「えっ! いや! 違う! あっあと、わた…いや俺はキリシマ アズサ霧島梓だ!」

慌てる梓に葵がクスクスと笑う。

「てか…何だその格好…」

「……………はあ？」

訝しげに葵を見上げるが葵はまじまじと梓を見ている。

「そういう趣味？それとも罰ゲーム？」

「な、何がだよ！」

「だってお前…女だろ？」

ポクポク——チーン。

梓の頭の中で御愁傷様というように鐘が鳴った。

大きな瞳を更に大きく開いてパクパクと口を開閉させた。

「バツ…バレちゃった♪」

「…えっ？趣味なの？罰ゲームなの？」

きょんとする葵に梓は口をひきつかせながらきこちなく笑った。

【陰謀？野望？】

霧島梓が“彼”になったのは、約2時間前に遡る。

「ああら：良く似合ってるじゃないっ！：男の子そのものだわ！」

赤い唇が楽しそうに声をあげた。

広々としたリビングにはイタリア製のソファ、暖かな日差しを注ぎ混む一面の窓にもイタリア製のカーテン、見るからに懷に余裕のある暮らしをしている者の棲み家だ、というのは偏見かもしれないが。

「何だと！ふざけんな！この格好は何なんだよ！」

そう叫んだのは、バッチリ男子の制服に着替えた梓である。

「似合うんだから良いじゃない！今日からあんたは男子高校生！」

「はあああ！？」

「ママ：やっぱりこれは僕は嫌だなあ：」

梓の隣に父親が近付いて来た、まだ寝癖を直していないパジャマ姿だ。

「…は？」

ギロツと睨まれた父親はママと呼んだその女に尻尾を丸めて梓の後ろに隠れた、といっても梓の体より縦にも横にも二倍はあるその体が隠れる筈は無い。

「どういう事だよ！私はこんな事、聞かされてねえし！」

「言っていないもーん！」

可愛い子ぶったママが頬をぷっくりと膨らませた。

「なんだそれ！てか、何で男の格好しなきゃなんねえーんだよ！私は正真正銘、純粹無垢な…女の子だぞ！」

梓は勿論のこと怒りと共に声を荒げた、その勢いにママが静かに空気を吸う。

「純粹無垢って赤ちゃんかつ！ていうか、その男勝りな態度も口調も天馬学園のフリフリ…そうでもないか…まああんたには似合わないわよ女子の制服は、着たいんだったらその性格直しなさい！」

「は、はあああ！？なんだそれ！！それでも母親かよ！ってか私がこの性格になったのだって、あんたら親の……てか！服が似合わないからって理由は有り得ないだろ……！」

眉間に皺を寄せていきり立つ梓に対してママは平然としている。

「誰がそんな理由で男になれって言ったの？」

「へっ？」

ペタンペタンペタン…とスリッパを鳴らしてママが近付いて来た、モデルとして海外にも進出している母には怖い無しというフレーズがピッタリである、それがママの強みでもあり、その気迫に気圧されて梓は怯んでしまう。

「それより、そんな怒らなくていいじゃない、短気は損気よ」

微笑するママに梓は額に汗を浮かべる。

「…なっ何言ってるだよ…睡眠薬まで入れて眠らせて服まで着替えさせて、これで怒るなっるのがおかしいだろ」

「あーらあら…自分の娘に睡眠薬なんて…そんな恐ろしい事する訳無いじゃない？ 昼ドラ？」

「……嘘つけ！ 聞いたぞ全部！」

「やだわあゝ梓ちゃんたらあゝメイドは信じて、ママは信じてくれないのおゝ？」

わざとらしいその仕草とくねくねさせる体に眉間に皺を寄せり梓、ママはふっと口角を上げると腰に手を当ててモデル立ちをした、まるでそのしなやかな脹ら脛ふくろはぎを見せびらかすようにだ。

「天馬テンマの家に生まれた女は皆こうするのよ、これは代々受け継がれた伝統…」

「だから聞いた事ないって…」

「だから言っていないって言ったじゃない、良い？ これは試練よ、そ

して…ここ重要ね？」

1つウインクして、手でピストルを作ると梓に向ける。

「良い男をゲットだぜ！」

バキュン！と口で言いながら梓の胸を撃ち抜いた、目を丸くして梓がピクピクと片方の口角を痙攣させた。

「…ぽっポケ○ン！？…はっ？てか、はぁぁ！？なんっだそれ！！…もう一回言うわ、なんっっっだそれ！！！」

驚愕する梓は声を上げるのと同時に瞬きを繰り返した、余りの事に態勢が崩れそうになり、後ろにいた父親が梓の体を支える。

「…梓ちゃん…」

小声で心配そうに父親が言い、ママは腕組みをして「ふんっ」と鼻を鳴らした。

「やっぱり僕は嫌だよママ！伝統だか何だか知らないけど！梓ちゃんは歴とした女の子だよ？」

梓が父親を見上げた、あのママに反撃する姿にどこか信頼の眼差しを向ける。

「そうだそうだ！私は立派な女の子だったの！トイレとか着替えとか！どうすんだよ！すぐバレっちゃうじゃねえか！」

「…梓…そこをバレないようにやるのよ！スリルがあって良いじゃ

ない！ちよつとやってみちゃえば良いじゃない！」

「軽っ！てか甘く考え過ぎだろ！どうすんだ、こんな健気で可愛い私がつてか娘が男子に乱暴されたら！……まっ、負ける気はこれっっぽちもしねえんだけどな？」

親指と人差し指の間を僅かに開けながら自信満々に梓が言う、ママが満面の笑みを向ける。

「なあら、良いじゃない！私の娘よ、誇り高き天馬の娘よ！？出来ない事は無いわ！：梓が本気になれば何でも楽勝よ！よっ日本一！」

「日本一？」

「そう！日本一！！！」

「そっそうかなあ？：てかまあ健気で可愛いって所はちよつとツツコミ入れてくれたら有り難かったんだけど？」

「あらそうね！でも本当の事だから敢えてツツコまなかったわ！充分期待してるし！」

「まっまあさ！男子よりも男子になってやるわ！って感じだよねえあはは！」

勢い良く梓が拳を掲げた、うんうんと頷くママは同時に小さく拍手をする。

「ちよっママ：梓ちゃん！本気！？：自分が何を口走ってるのか分かってる！？」

父親が梓の拳を握り締めた、梓は一瞬きょんとして、はっとした。

「ヤベッ危ない危ない！否定してたのにいつの間にか肯定してた！」

「これじゃ先が思いやられるよ…」

額に手を当てて首を振る父親の肩がピクツと跳ねた、ママの瞳が一直線に父親を見ている、そこには優しさの欠片など微塵も無かった。

「…………チツー！」

「…ま…ママ…？」

ヒクヒクと口元を引きつかせて父親が身震いした。

「パパ、この家では私が法律でしょ？」

きっぱりと言い切るママに、父親の顔を青ざめ、よろめくと今度は梓が父親を支えた。

「…いやっあの…」

「口出し、しないでちょーだい！これは女同士の話なのよ？」

「あっすみません…」

「お父さん…」

「ごめんねパパは力になってあげられないみたい」

苦笑しながら深いため息を吐く父親に梓は同じく苦笑して首を横に振った。

「さあて梓：出来ないとは言わせないわ？」

「…つか、伝統なんだろう？やるしかなくねえ？」

ため息混じりに言い、梓はネクタイを少し緩めた。

「その通り！分かってくれたのね梓！」

「まあ：だって仕方ないだろう！ヤダって言ってもやらせるんだろ！？拒否権はないんだろ！だったら嫌でもやるしかねえじゃん！つかもうやるよやる！」

じつと睨むようにママを見つめて、梓はガシガシと頭を搔いて「はあっ」とため息を吐き出した。

「…よく分かってるじゃない！あつそれと名字はパパの旧姓の霧島って名乗ってね？理事長と同じ名字で、学校と同じ名字だなんて、勘繰られたら面倒臭いからあゝ」

「はいはい…お父さんが理事長だったのもバレたらいけねえのな…」

ニコニコと楽しそうに笑うママに梓は長い髪を揺らして背を向けた。

「そうよ、それとあんた分かってるみたいだけど…忠告するわ、女

ってバレたら…承知しないからねえ？」

妖艶な口元がにやりと笑い、梓は振り向き体をブルツと震わせた。

「もう、どうにでもなれーってえの…」

呟き、梓は背中を丸めて困惑する父親と満足気なママに見送られ部屋を後にした。

パタンツと扉が閉まった後、不安そうに父親がママに向き直った。

「ねえママ…」

「なあにパパ？」

「…ママと出会った時、高校生だったよね？」

「そーよー？」

終始笑顔でママが答えた、父親は眉を顰めて小首を捻った。

「あの時、ママは男子の制服なんか着てなかった気がするんだけど記憶違いかな？」

「いいえ、私はちゃんと女子の格好よ？」

「……………えっ？」

「……何か？」

「…じゃ、伝統ってのは…もしかして…」

疑うようにしてじとーつとママを見るがママは臆さなかった。

「…さあて、どうかしらね？」

ふふんと鼻を鳴らすママに父親は目を丸くして慌てた。

「えっあつまま！？嘘なの？梓ちゃんに嘘付いたの！？それバレたら絶対怒るよ！」

「パーパ？……バレなきゃ良いんじゃない？」

「ええっ！…！！？」

叫ぶ父親にママはクスクスと笑った。

それから携帯電話を手につつと何やらメールを打ち始めたのである。

【視線の先は】

「はぁぁぁ…」

入学式が始まって直ぐに梓の口から深いため息が漏れた。

体育館にはA組からD組までの生徒達がずらりと並んでいる、クラスは1クラス30人ほどいて、それぞれが一樣にして緊張に満ちていた。例外は、少なからずあるが…。

“女ってバレたら…承知しないわよ?”

例外の一人である梓は、ママの言葉を頭の中でリピートしてした、リピートする度にだんだんと血の気が引いていくような感じがして頭がくらくらしてきた。

「着席…!」

タイミング良く司会進行の先生が言って、梓は用意されていたパイプ椅子に腰を下ろした。

「バレた事を自分が言わなければママの逆鱗には触れない筈だ…ん……よし…」

そう言い聞かせて、小さく頷く。

「……………んっ?’」

梓は周りをチラッと見た、気のせいか、女子の視線が何だかピンク色に変化している、しかもそれが自分へと向けられている。

「……えええ……」

ため息と同時にひ弱な声を出した、何人かの女子と目が合い、彼女達は恥ずかしそうに目を反らしたり、顔を背けたりしている。

「マジかよ……」

うんざりしたようにいって、梓は肩を落として座り直すと、目を伏せた。

「新人生代表、崎村葵」

司会進行の先生が一息に言った。

「へっ…!?!」

パチッと目を開け、梓は思わず声を上げてしまい口を抑えた。

聞き間違えだと思ったのである、梓の中の葵は、煙草を吸う不良だからである。

けれど、聞き間違えではなかった。

梓の目の前をフヨフヨとピンクのハート（先程よりも濃い）が浮かんでいる。

「えっ…あっ…んん!？」

ゴシゴシと目を擦るがハートはどんどん増えていき、その内、いや、今まさに体育館がピンク色に染まった。

「まさか…」

壇上へ上がるのは、やはり葵である、煙草を吸っていた時よりもネクタイも服装もキツチリとしていて優等生そのものだが、何しろ、顔だけは良いのだ。

女子の視線が葵に釘付けなのである。

「……マジか……」

壇上に上がった葵は一礼し、スラスラとどこかで聞いたような、在り来たりな文章を読んでいく。

その姿に、何百個という熱い視線が突き刺さっている筈だが気にする様子も物怖じする様子もなく、堂々とし落ち着いている。

「……何なんだ、あいつは…」

梓は他の女子とは違った目で葵を見つめた。

新入生代表という事は学年首位だという事、となると顔も良くて頭も良い、ついでに運動神経も良ければ…、完璧だ、モテる要素が凝縮したような男である、ただ、性格まではまだ分からないが。

「…て、どうでもいいや…興味ねえ」

ふぁ…と口を開けて梓は欠伸あくびをした、椅子に深く腰かけて腕を組み頭を下げる、これはマジで居眠りする五秒前の姿だった。

＊

入学式が終わると、新入生達は一旦教室に戻った。
A組から順番にぞろぞろと渡り廊下を歩いて行く、その中で、梓は目を擦っていた。

「……お前まだ眠いのか？」

背後から呆れたような声がして、梓はコクコクと頷いた、相手が葵だと分かったのは無駄に良い声の持ち主だったからである。

「二重人格だったのか…大変だな？」

「…誰が？」

「新入生代表」

「俺？ そうだったんだ…知らなかったよ」

クスクスと笑いながら葵は首が苦しいのかネクタイを緩めた、隣を歩く女子達が「ほう…」と甘い吐息を吐き出している、それを梓が目にして目を細めた。

「チッ…色男め、近寄んな！」

シッシツと野良猫を払うような手付きで梓が葵を払う。

「は？」

あからさまに機嫌の悪そうな顔をして葵が梓を見下ろした。

「なにその態度、意地悪いな……？」

「あんたが一緒だと俺への関心が増えるだろ、迷惑だ、それだけでなく女子の視線が気になるのに……いやまあ気にしなきゃいい事だけど、嘘がバレたら……」

徐々に声を小さくさせて梓はぶつぶつと呟いた、それを葵がクスツと笑った。

「あゝ？」

「いや……大変なのはお前だったなーと思ってな？」

クスクスと葵が笑い、梓は無意識に顔を赤くさせる、「ふんっ」と鼻を鳴らして歩く速度を速めた。

「……あつ怒った？」

先に行く梓に、葵が後ろから声をかける。

「べっつにいゝ？怒ってねえゝよゝ？」

「ああ、そう……へえ？」

梓が歩く度に1つに縛った長い黒髪が揺れる、それを見つめて葵は、引っ張った。

「いてっ！…なあにすんだスットコドッコイ！！？」

怒鳴りながら髪を抑えて梓が振り返る、葵は足を止めて笑いを堪えるように手で口を抑えた。

「…ふはっ！スットコ…久々に1つてか懐かしいフレーズだな、それ、今聞かねえぞ？」

「…なっ！そうじゃねえだろ！髪引っ張ったら、痛いだろ！！」

「そんな強く引っ張ってないじゃん…？」

腹を抑えながら、首を傾げて葵が言う。

「ちーがーううう！強いか弱いかわねええ！引っ張ったって事に怒ってんだよ！ガキか！引っ張っても面白くねえだろ！」

「…ああ確かに…！」

ポンッと手を叩いて葵が感心する、そんな葵の態度に梓は怒りを増幅中だ。

「ああやあまあれえゝつてえのお…！！」

低い声を出して、梓はジトーツと睨み付けた。

「はい、ごめんなさい！」

ニツコリと爽やかな笑顔で答える。

「本当に悪いと思ってんのか？」

梓がじーっと見つめ続けていると、眉を下げて葵が大きく頷き手のひらを見せ、「神に誓う」と呟いた。

「…しゃねえ、許す」

「どうもありがとう」

「何か…やっぱり、癪に障る言い方だな…」

「気のせい気のせい…」

へらへらと顔を緩ませて葵が笑った、梓は唇を尖らしながらも納得しようとうんうんと頷き、歩き出した。

「にしても、引っ張りたくなる髪だよな…？」

「なんだそれ…」

「さあ？」

ふっと笑み、葵は腕組みをする梓の横顔を見た。

「全く…髪は女のいの…いの、いの、猪木、ボンバーいえい…」

「……あはははっ!!」

「笑うなあああ!!」

梓が真っ赤になって大声を上げた、葵は笑いが抑えられずに涙まで流す始末。

そんな2人の様子を、周りの生徒達が楽しそうに見ているが、当人達はそれに気付いていないようだ、全く以て：騒がしい2人である。ただ1つ間違いを訂正するのであれば、2人を見ているのが、生徒達だけでは無い、という事だ。

「イタタツ：あははっ」

「だーからああ笑うんじゃねえよ!」

いつの間にかB組の生徒達に混じっていた梓と葵、梓はバシバシと葵の背中を叩きながら、ふと思った。

「あれ、まさか、葵君って：同じクラス？」

「：呼び捨て、で、いいよ？何か気持ち悪いから」

「：なんだと！？って！やっぱりそうなのか！？」

「とりあえず1年、よろしくな？」

葵はニッと笑って、目を丸くする梓を見つめた。

【telephoneつまり携帯する電話】

しん…と静まり返った教室から、静寂を破るように男が声を出した。

「…私は従うまでです…」

携帯電話を耳に当てながら神妙な面持ちで男は言った、どこか含みのある返答だが言った言葉に嘘はない。

「…はい」

ふうと息を吐くように返事をして、男は携帯電話を切った。

ジャケットの内ポケットに携帯電話を仕舞いながら窓から注ぐ太陽光に目を細める。

「あれえ…葵！？まあだ居たのかあ！！」

教室に響き渡った明るい声というより騒がしい声に葵はうんざりした様子でため息を吐いた。

「お前こそだろ？梓…」

「あっはっはっ！俺はあれだよ！学校見学だよ！とりあえず一周して来た！いやあ良い汗かいたあ…！！」

現在、あれからホームルームも終わって新入生は下校する時間になった、残ったのはこの2人だけである。

「どんだけはいでんだ…」

苦笑しながら葵は梓を横目に見た、徐に結った長い髪を解くのである。

「あつい……」

サラリ——と、黒髪が風もないのにそよぐ、格好が男でなければ、いや、そうでなくても目を奪われるような仕草である。

「何してんだ…」

頬を指で搔いて腕を組み葵が言う、梓はパタパタとうなじを手で扇いでいる。

「汗かいたから頭皮に風通そうかなって？」

「……可哀想な子だな…」

「はああ？」

横目なジロツと葵を見て、髪を結び直した。

「バレて困るのはお前だろ、気を付けろよ」

「まあ確かに困るけど…学校の中だけ男の格好すりゃ良いだけだろ？余裕余裕！だってさあ、この学校、男子トイレも更衣室も、全部個室だったし！」

うんうん！と完全に気が晴れたように大きく頷いて、梓は葵に向か

って親指を立てた。

「…それだけの問題か？」

「はあ？　どういう事だよ」

「俺は一目でお前が女だって…」

ピクツと何か気配を感じて、葵は言葉を止めた。

きよんとする梓をよそにカーテンの裾を引っ張る。

ザ——ツとカーテンが2人を隠すように閉じた、梓はまだきよんとして不穏な空気を纏う葵をじっと見ている。

「てか、こんな誰が見てるかも分かんねえ場所で話すような事じゃねえな…」

そう言って葵は梓に近付くとその肩をトンツと叩いた。

「んーあーまあそうだな？」

見上げると葵が微笑んでいる、やはり「綺麗な顔だ」と梓は思いながら口にはしなかった。

「しかしお前も大変だな…その体で寮に住むんだから、まあ部屋は一部屋毎に、風呂、家電付きだから差ほど心配は無いだろうけどよ」

「へっ？」

「ん？」

梓が聞き取れていなかったのか目をぱちくりとさせて葵を見つめた。

「寮……？」

「寮」

「えっ、いやいや！俺は寮には住まねえよ！そろそろ迎えだって来る頃だし、それはほら！分かるだろ？俺が男子寮なんかに住める筈無いんだから！」

「いや、だから……大変だなんて思ってさ？」

「えっ？いやいやいやいや………どゆこと？」

合点の行かぬ梓はたじろぎながら机に寄りかかった。

「ホームルームで言ってたろ、寮に住む奴の名前と部屋割りは寮に着いてから発表するって、お前、名前呼ばれてたぞ……？」

「えっ聞いてない！そんな聞こえない！俺は寮に住むなんて言われてないし！他人事だと思って……！うーわー……マジかよ……！」

頭をガシカシと掻き乱して、梓は「うーうー」と唸るとの場にしゃがみ込んだ、葵は頭を掻きながら同じようにしゃがんで梓を見つめる。

「何とか、なんじゃね？」

「…他人事！それこそ他人事だあ！お前が逆の立場だったらどうするんだ！」

「よりどりみどり喰い漁る、かな？」

梓は真剣な顔をだんだんと崩していき、口をぽっかりと開けてワナワナと震えた。

「そっ…それ…」

「まあ冗談だけどね？」

クスッと笑って葵が真っ赤になる梓を見つめた。

「あっ当たり前だ！そんな事！」

「あはははは」

「笑い事じゃねえだろ！！！」

声を上げる梓に葵はにこにここと笑っている。

梓はペタンと座り込むと両手を床について、大きくため息した。

「どんな奴と部屋を共有するのか…分からないんだろ…？」

「寮に行けば、分かると思うけど…」

「私は…わたし…あっ俺…は…」

梓の声が僅かに震えている、俯いていて表情までは葵には分からないが、尋常では無かった。

「梓…」

「俺は嫌だ、嫌なんだよ兎に角！男と同室なんて嫌だ！」

叫ぶ梓に少々面食らいながら葵が見る、梓はズボンのお尻のポケットから無造作に携帯電話を取りだし、どこかへかけた。

「…あつもしもし！母さん！？」

バツと立ち上がって拳を作った、葵が見上げながら目を反らして、程無く立ち上がる。

「どういう見だコノヤロウ！言ってなかったじゃねえか！何で俺が寮に入らなきゃならねえ！」

『…うるさ…』

苛立った様子で電話の向こうのママが呟く。

「…で、どういう事だ！」

『……第一に、あなたが天馬の娘である事がバレないようにする為、第二に、誰かに頼らずに身の周りくらい一人で何でも出来るようにさせる為、第三に、自分がどういう人間であるか、どういう立場の人間であるかを理解させる為、第四に……』

電話越しにだんだんと顔を青ざめる梓を葵が不思議そうに見た。

「あっあの…」

『第六に…』

「すみませんっした!!」

ブツン——ツと梓は一方的に通話を遮断させる、額の汗を手で拭いながら満面の笑みで葵に向き直った。

「…どうだったんだ？」

「……俺は、無力だった…」

「上手く丸め込まれたんだな？」

「いや…はは…」

頬をポリポリと搔いて、梓はあからさまにぎこちなく笑った。

ブーブーブーブー…と携帯電話が鳴る、ギクツと梓の肩が上下しみるみるうちに顔が青ざめ、いや、白くなっていく。

しかしながら無視でもしたら後が怖い、意を決して携帯電話を耳にした。

「も…し…もし? あれ?」

「…はい、もしもし? ええ、梓なら目の前にいますけど…」

携帯電話を耳にしながら葵が梓を見つめている、梓はどこかホッと
しつとも何故か嫌な予感がしてならなかった。

「…はい、はい、梓…」

葵が梓に携帯電話を差し出すと梓は恐る恐るそれを耳に当てた。

「もしもし…」

『どういう了見、かしら?』

鼓膜を脅かす声に梓は体をブルツと震わせた、この主は勿論あの人
である。

「お母さ……」

『…身勝手にも程があるじゃなくて? そんな娘に育てた覚えはない
わよ? てかむしろ、私に“コノヤロウ”なんて口聞くバカはこの
どいつかしら、その度胸は認めるけどはつきり言って無謀…いいえ、
ケンカ売ってんのかコノヤロウ…?』

口調は静かなのだか刺が溢れんばかりである、梓の顔色を見ていた
葵は「御愁傷様」という風に両手を合わせている。

「あの、すみませんでした…」

『分かればいいのよ、分かれば…という事で、寮に住みなさい』

「でも、言ってくれば良かったじゃん…何でいつも寸前になって

言うの？小学校三年生の時だって…」

『あんたそれ小学校四年五年六年中学の1、2、3…昔の事を掘り返す気？…女々しいわね…仮にも、今は男の子でしょ？』

「…うつ…」

『……………ごめんなさい』

「お母さん…？」

『この電話は現在使用中ですので切ります』

「はぁッッ！？」

ブツ——ッと携帯電話が切れて梓は葵と顔を見合わせた。

「…住みます、寮に…」

「そうか…」

「てか何でお母さんが葵に？」

「さあ…？俺が聞きたいんだけど？」

「そか…」

うーんと唸りながら梓は腕を組んだ、葵は肩を竦めて小さくため息を吐く。

「なあ、もう行こうか」

「えっああゝ…うん、うん…行く！もうこうなったらやるしかねえ
！！」

「ああ、そうだな」

ふっと笑って葵が歩き出すとその後ろを梓が追った。

＊

とある部屋には右側に二段ベッドがあり、中央には青空を切り取ったようなカーペット、ベランダを隠すように水色のカーテンが覆っている、寒色系の色に包まれたこの部屋の壁は白で統一され、左手に見えるドアには風呂場、その横にトイレが設置され、室内にはテレビが備え付けられている。

ガラン、としたその部屋の一角にはまだ蓋の空いていない段ボールが積まれていて、ボウズ頭の男が今まさに蓋を開けた。

「あつ、これ…俺のじゃない…」

ポツリと呟いた男は頭を掻いて蓋を閉めた。

これから一緒に住む誰かを想像したのか、しないのか、無表情のままカーテンを開けようと立ち上がる。

シャツと小さく開くと頂上に座していた太陽が傾きを変えていた、じっと腕時計を見て男は目を擦り、小さく欠伸をする。

プルル…プルル…と鳴り出す携帯電話に男は振り返った、まだ布団の無いベッドで揺れ動いている。

「もしもし…ああ…ん、無事に荷物は届いた…」

電話の相手に微笑みかけるその顔は穏やかだ。

「ああ大丈夫だから、心配しないで…ん、それは、なるようにしかない…」

困ったような顔をして男はまた窓の外を見た、その瞳が何かを捕らえたように一点を見据えた。

「…もう、切るよ…」

男の視線の先には梓と葵がいた、男は表情を変えぬまま目を反らさない。

「ん…？」

「どした？」

葵が立ち止まると梓が首を傾げて近寄った。

「いや、何でもない…」

安心させるように梓に微笑みかけると梓はにこーっと笑う。

2人はこれから住む寮の玄関までやって来た。

寮は四階建ての大きな一軒家である、オレンジ色の煉瓦造りで寂れた洋館を思わせるが、どこことなくヨーロッパの田舎にあるようなアットホームな家だ。

それを見上げる梓に葵は向き直った。

「よろしく梓」

「んだよ改まって！よろしく葵！」

歯を見せ梓が笑った、つられて葵が笑う、両開きの扉に手をかける梓の後ろで葵の視線は三階の端から二番目の部屋へと移動した。

「……やるしかねえ…か」

1つ呟くと、葵は梓に続いて寮に入って行った。

【曖昧ミィ?】

夕暮れに包まれる校舎、梓は物思いに更けているのか、それとも夕御飯が一体何なのかを考えているのか、体育館と校舎を繋ぐ渡り廊下の真ん中でオレンジ色の空をぼんやりと眺めていた。

「待ってた感じ？」

「今週に入って、4人目：可哀想に」

梓の後ろに立つのは苦笑いを浮かべる葵だ、ついでにいうと、校舎の方から泣きじゃくる女子を囲うようにして女子が輪を描いて校門へと向かっている。

「仕方ないじゃん、俺には好きな人がいるんだよ」

一瞬、梓は耳を疑った、バツと後ろに振り返り葵を真っ直ぐと見つめる。

「まっマジで!？」

「嘘」

目を見開いく梓に対して嘲笑するように葵がにっこりと笑った。

「なっとなんじゃそりゃああああ!?!？」

咆哮する声が校内中を駆け巡る、そろそろ羽根を休めようとしてい

た鳥達が慌てて羽ばたいた。

「あははははっ！」

「なにそれ！ちょっとあれだよ！応援しようとしたのに！なんかこう恋の相談とか乗りたかったのに！」

「それってお前の都合じゃんよ、てか、お前に恋の相談とかしねえよ…絶対フラれるわ」

「なんだと！これでも…あつあれだよ…あの…」

だんだんと梓の表情が曇っていく、いつもとは何かが違うのだが葵は無言のまま優しく笑った。

「あ、あの…」

「今日は確か鮭のムニエルと魚介スープに…」

梓の言葉を遮って葵がぶつぶつと喋り出した。

「腹、減ったろ？」

「うん…」

「お前良く食うもんなあ？」

「お前もだろ！？」

「食える時に食わなきゃ損だろ、飯がタダなんて、貧乏人には夢の

ようだよマジで」

「貧乏人には見えないけどな…」

「まあ確かに食わせてはもらってたかな…」

「それ、誰に？って聞いていいもん？」

「………ん？」

満面の笑みで葵が見つめる、夕日がその黒髪に混じるようで何処と無く妖艶さを生み出し、ちょっと不気味だ。

「何でも無いっす…」

「さあ行こう…！レッツラゴーだな…」

歩き出す葵の背後で梓が「なんか古い…」と呟き追った。

＊

広々とした室内に響くのは食器のぶつかる軽快の音、どこかのレストランのようなそこには間接照明が並び観葉植物が室内を彩り、並んだ丸テーブルの1つに梓がてんこ盛りのサラダを運んで来た。

「まだ食うのか…」

「だってえサラダ美味いんだもんよ、美味でござりまするううつて叫びたいくらいだよ」

「言えば？ある意味人気者になれるよ？」

コーヒーを啜りながら葵がサラダをモシヤモシヤ食べる様を見た、肉だったら野獣のようである。

「あっ…竜美^{タツミ}」

葵が手を上げひらひらと振った、口にドレッシングをべったり付けた様が振り返る。

「いたのか…」

近付いて来る男こと竜美が低い声で呟いた、体格が良く坊主頭の為、頭がやたらと小さく見えモデルでも出来そうだが彼のキャラではない、竜美は椅子を引く葵の隣に座った。

「飯食ったの？」

「ん、2人が来る前に」

「そう…」

淡々と2人が話すのを梓が口をモグモグしながら見ている。

「竜美さぁサッカーボールが欲しいの？」

「えっ、なんの話？」

竜美がクスクス笑う葵を見た。

「お前寝言言ってたぞ？」

竜美は顔に似合わず頬を赤くした、梓がまじまじとそれを見ていると竜美が自分の顔をゴツゴツとした手で隠した。

「可愛いなあ」

表情を緩めて梓が口の周りをナプキンと拭き取りながら言う。

「俺は寝言聞いて買ってあげたくなったよ」

「やめろ…」

竜美が弱々しく言って2人に顔を反らした、梓と葵をそれを更ににやにやしながら見る。

「2人して…」

「だって、なあ？」

「なあ？」

葵に答えるようにして梓が言う、梓は2人を同時に見て羨ましそうにため息を吐いた。

「良いなあなんか、二人部屋…」

「いやいやお前ん所も二人部屋じゃんよ、1人で広く使えるんだから文句言うなって…」

「それ俺が邪魔って事？」

「さあ？どうだろ…？」

竜美に不敵な笑みを溢して葵がコーヒーの最後の一滴を口に含んだ。

「でも2人を見てるとやっぱり楽しそうだしなあ…」

言いながら梓は葵の視線に目を反らした、女なんだから無茶言うなという目である、それを分かっている、という目で梓は葵を横目に見た。

「どうした？」

「なんでも無い」

2人が揃って竜美に言う、2人は一瞬顔を見合わせて直ぐに顔を反らす、竜美がふっと笑った。

「そろそろ行くか？」

「そうだな…梓、お前もイビキやめてくれる？こっちの部屋まで聞こえて…」

「なっ！イビキなんてしてないし！」

真っ赤になって立ち上げる梓に竜美が肩を叩いた。

「冗談に決まってる」

「あっうん…」

梓が食べていたサラダの皿と自分が飲んでいたティーカップを片付ける葵の背を見つめた。

バフツとベッドにダイブした梓は濡れた髪をゴシゴシとタオルで拭いた。

「……………」

体を上に向けて真っ白な天井を見つめると、にやついた。

思えば、梓は広い屋敷に住んでいた為、一人部屋もかなり広く、それは持て余すほどであり寮の部屋は大体トイレの広さと変わらない、それでも梓にとっては快適な空間だ。

「静かだ…」

耳を澄ますと微かに隣の部屋にいる葵の声がする、話している内容は聞こえないにせよ何となくだが心地が良い。

良く聞いているとガラリと窓を開ける音がして梓は起き上がった、タオルを首に巻いて早速とベランダに出る。

風に浚われる白い煙り、ベランダの手摺に肘をかけて葵は煙草を吸っていた。

「不良だ、不良…」

ガラツと窓を開けたまま梓が葵を見た、葵は素知らぬ顔をして口からフウツツと煙を吐いた。

ベランダには腰丈ほどの壁が有り、それを越えれば隣同士を行き来する事が出来た、それが生徒達の為になるかどうかは分からないがこの寮はそういう作りになっている。

「頭、乾かせよ」

「大丈夫だよ、俺は風の子だ」

「どういう言い訳だよそれは…」

小刻み肩を揺らしてククツと葵が笑う、梓は何故か偉そうにふふんっと鼻を鳴らしている。

「てか、何か用か？」

そう言われて梓は腕を組んだ、葵は首を傾げる。

「不良を更正させてやろうかと思ってさ、てか、先生に見つかったらどうすんだよ、防犯カメラだってあんのに…」

「バアカ良く見ろ、あのカメラ門にしか当てられてないって、それに動く様子もない、大丈夫だろ」

林に取り付けられた防犯カメラは葵の言った通りだった、梓は暗い林の中をじっと観察するが良く見えない。

「そんな事まで調べて煙草吸うのか？」

「ああまあな…煙草は主食みたいなもんだし…」

「うわうわっ…有り得ない…そのうち体中真っ黒になんぞ？」

「あははっ」

「ええええ…絶対笑う所じゃねえよ！」

「あはは」つと葵は笑い続け、手に持っていた携帯灰皿の中に煙草をグシュツと潰した。

「葵、助かった…」

「ああ」

ガラリ——と窓が開き、竜美が顔を出した、梓と目が合い小さく笑

いかける。

「助かったって…?」

「来週テストがあるからノート見せてもらってた」

「えっ……テスト?…それって美味しい?」

ぎこちなく笑う梓の顔がみるうちに青く変色していく、それを横目に葵がため息を吐いた。

「ヤギなら美味いかもな…あれ、ヤギだっけ?」

葵が竜美に見た、梓はそう言う事じゃなくてと額を押さえるが、竜美は気にせず口を開いた。

「ヤギの筈、そう言われと何だか自信が無くなるな」

「メェーって鳴く動物ってのは確かだよな…」

「えっじゃ、羊も有り?」

「羊か、そういえばお前のクッションってあれ羊の…」

「どおおうでもいいいい!!!!…てかヤギだよ!」

2人の不毛な会話に梓が声を上げた、肩で息しながらクスクス笑う2人を睨み付けるように見た。

「ズルい！学年首位のノートはズルいセコい！俺にも見せろよ…！」

「なんで？」

学年首位が眉を顰めてまた煙草を口にくわえ火を付けた、竜美がベランダに出て来て肩を竦める。

「なんでって、竜美に見せてなんで俺には見せてくれないんだよ…？」

「竜美は帰国子女だし、日本とはまた違うからな…」

「ええ…：てか帰国子女かあ…：」

「まあ見せない事もないけど…：？」

「マジで!?!？」

「いいよ？条件付きでもいいなら」

梓の爛々と光る目が一気に光を失う、葵は薄らと笑いフウツと煙を吐くと暗い夜空に白い煙が滲んだ。

「じょじょ…：条件て？」

恐る恐る問うと、葵は満面の笑みを作った。

「考えとく」

「なっなんだそれ、先伸ばしにされると気になって眠れなくなるじやねえか…」

「だったら寝なきやいいだろ？」

「無理だ！」

「じゃあ寝ろよ」

「そうさせてもらおうじゃねえか！」

「威張って言うな、まあとりあえず、ノートは貸してあげるからもう部屋に戻れ、で、髪を乾かしたら取りに來い」

グシュツと煙草を携帯灰皿の中で潰すと葵はスタスタと中へ入って行ってしまふ、残された梓が竜美を見た。

「なんだと思う？ 条件て…」

「さあな、葵の事だから自分に有益な事なんじゃないかな…？」

「うわ…策士だなあいつ、てかなんか…なんつか…」

「何？」

「なんだろ？」

聞いているのに聞き返されて竜美は表情には出さないが戸惑った。

「それより、髪乾かさないと…風邪引くぞ？」

「ああそう…だ…ッ…ヘーックシヨイ！！！！うわぁ～やべえな、またな…」

梓は鼻を押さえながら片手を上げると部屋に戻って行った、それから春の夜風が吹き付け、竜美が身を震わせた。

授業終了のチャイムと共に梓が背伸びした、ついでに顔が崩れるくらいの大欠伸である。

「眠そうだな」

「竜美なら分かるだろ？あのノートには変な魔力がある」

「そんな事言うとなんか悪いって怒られ…」

梓が指を差した、その先を追うようにして竜美が見ると向けられた先に机にうつ伏せる葵がいた。

「珍しく寝てんだよなあ…どうかしたのあの色男…？」

「昨日遅くまでパソコンいじってたみたいだけどな…？」

「へえ…エロいサイトでも見てたりして？」

「そんな事をしなくても葵ならやりたい時にやれると思うぞ？」

「たっ確かに！！！」

梓が声を上げると同時に葵が顔を上げた、2人の視線に気付きギロツと睨み付ける、2人の顔が一瞬青ざめた。

「あっあの…」

1人の女子が葵の視線を遮るように梓の前に立った、梓は助かったと思いながら女子を見上げた。

「なに？」

「えっと…頼みたい事があるの…あの、嫌だったら良いんだ！無理強いは絶対しない！」

何を緊張しているのか女子の声は震え顔が赤い。

「頼みたい事って…？」

「あ、あのね…校内新聞にインタビュー記事があって…梓君を載せようって話になってて、私同じクラスだから頼んでみてって言われて…」

「そっか…良ひツツタ！？」

「ダメだよ梓くん…?」

梓のポニーテールをグイッと引っ張り葵が女子に笑いかけた。

「こいつじゃ大した取材出来ねえよ?」

「タタタタッ! いい加減離せよ!!」

梓が頭を振る、葵が言われてパッと手を離すと振りほどかれた髪が
竜美の顔にぶつかりそうになり竜美が呆然とした。

「あっごめ…」

「いや大丈夫…」

「えっとなんだっけ? あーそーそー! 俺は別に……あっそうか
目立つ行動は…」

ふむふむと梓が顎に手を当てた、葵は肩を竦めて女子に向き直ると
女子が真っ赤になって顔を反らした。

「俺が代わりに取材受けようか?」

「……えっ!!?」

「ちよっちよっ…ちよっと! ちよっとちよっと!!」

慌てた様子で梓が腕を数回振った、それを葵が「古っ…」と呟いた
のは言うまでも無い。

「まっ待てよ葵！お前これ以上モテモテ君になったら大変な思いするのはお前だぞ！？」

「それを払拭させたいんだよ俺は…」

「ああ成る程！！って…何を言う気だ？」

「…協力してくれる？」

葵が女子へと熱い眼差しを送り微笑した、女子の首が自ずと縦に振られると梓と竜美が何とも言えぬ表情をして見合った。

＊

夕暮れ時、自分の部屋のベランダに梓と竜美が出ていた。

「葵…何してんのかな？」

「予測不可能…」

2人はぼんやりと校舎の方に目を向けている、竜美は梓を横目にふっと笑みを零した。

「心配する事はない…あの葵だ、要領良くやってるよ」

「うん…分かってるんだけど、そのつもりだけど、なんか胸がザワザワするんだよ」

「トキメキ？」

「なっ！なんでそうなんだよ！男同士だぞ！？」

「今じゃそう珍しくは無いんじゃないか？」

「いやいやいや…俺はノーマルですから！って…もしかして竜美…」
ジトーツと竜美を見る。

「違います、でも偏見とかは無いんだよね…誰を愛そうがその人の勝手だし、幸せならそれでいい、不幸よりマシだ…」

「竜美・・・何か饒舌だな…？」

不思議そうに竜美を見て、梓はまた校舎の方を見つめた。

「愛か、愛ねえ…？」

放課後から差して時間は経過していない、葵が女子に誘導されてやって来たのは事務室のような堅苦しい内装の部屋だった。

「まさか…君が…？」

ゴクリと息を飲み、僅かに震える声を出したのは部長と紹介された

男である、小柄な体型に分厚い眼鏡をかけ、黙ったまま小さく笑う葵を見上げている。

「…ほ、他の部員には席を外してもらってます…」

「賢明ですね」

静かに、葵は言い、部長は緊張した面持ちで手を胸に当てた。

「それで…あの…」

「取材、しないんですか？」

2人きりの室内に葵の声は妙に響き、部長は更に胸をギュッと押さえた。

「取材…なんて、そんなの、ただの…」

「さて、貴方は何の話をしているんですか？」

威圧的な葵の態度に部長は顔を反らし、小さく唇を噛んだ、その口元が痙攣している。

「…誤魔化さないで下さい…君が来た理由は…」

「…だから、貴方は何の話をしているんですか？俺は梓の代わりに取材されに来たんですよ？貴方の、狼狽える理由が分かりませんが？」

葵は淡々と言い、眉を下げ瞳を潤ます部長にため息を吐いた。

「…分かりました、そんなに本題に入りたいなら話させてもらいますよ?」

「やっやっぱり…その為に…」

「ええ、ですが女子の為に取材なら受けますよ?でも貴方が急かすなら始めにそちらの、話しにしましょうか…?」

窓から差し込む夕焼けが葵の瞳に反射し、オレンジ色に光った、部長はそれを見つめながらスツと胸から手を離し向き合う。

「…認めます」

「物分かりが良いですね」

「だてに2年間過ごして来た訳じゃない、この学校に君のような人間がいる事は知ってる、でも…」

「でも?…その続きを聞いたからといって、俺は情に流されませんよ?」

「分かってる…」

苦虫を噛む部長が手に力を入れる、それを冷ややかに葵が見た。

「ただ…知りたかった、僕以外の人間を…君には分からないだら、不安や孤独に押し潰れそうになる僕の気持ちなんて…」

「知る訳ないじゃないですか…」

「…怖いんだ、時々、凄く怖くなる…」

言いながら部長は身を震わせ俯いた。

「だから…、知りたい…と…思ってたんだ…」

「……貴方の場合、自分で決めたそうじゃないですか…それを今更…」

冷たい葵の言葉に部長の目からは涙が流れ出した、それを見せまいと手の甲で拭うが溢れ出したそれは中々止まってくれない。

「…抱き締めませんよ俺は」

「……はあっ！？ なっ何を気持ち悪い事を！」

「いや、そんなシチュエーションみたいだったから…」

顔を真っ赤にする部長に葵はへらっと笑った。

「…てか、深刻に受け止めてるみたいですが、貴方のやった事は未遂、こちらとしては痛くも痒くもない、ただ、あれ以上踏み込んだら……分かりますよね？」

「…はい」

部長は素直に答えた、その表情にはどこか安堵の様子が伺えるが葵を晴れ晴れとはしていないようだ。

「…俺だって、押し潰されそうになる時はありますよ…」

「えっ？」

「いえいえ、で？取材はどうします？フリだけでもしておきますか？」

「あー…いや、いいよ、本当だったら梓君を呼びたかったから…」

「…残念ですね、あいつは今頃飯にガッツいてる頃でしょうし、てか何で梓？」

「だって、僕と同じ…」

「なんなら風呂覗いてみればいいじゃないですか、はっきりしますよ？」

葵は腕を組みため息した、部長は顎に手を当てて訝しげに首を捻った。

「…まあ、俺は忠告しに来ただけですから…」

「でも君が出てくるって事は…可能性…」

葵を見れば怖いほどの満面の笑みである、部長はそれ以上何も言えなくなった。

「…あいつは多分、貴方の事情を聞いたりなんかしたら貴方の為に行動を犯しかねない、それは俺に面倒がかかるって事ですよ、だから」

ら会わせないんです、もし会いたいというなら俺も同行させてもらいますよ…」

「分かった、なら、取材は後程、2人でって事にしようか…?」

「…えっ結局取材は有るんですか?」

「だって、今や女の子達の興味は君達に向かっている、同人誌とかにも主役を張ってるくらいだ…」

「なにそれ喜んでいいの?」

顰めっ面の葵に部長はクスクスと肩を揺らして笑った。

「…分かりました、今度、3人でお願いしますよ」

「3人?」

「そ、仲良しなんで?」

微笑み、葵は一度会釈した、それに答えて部長も会釈すると葵の背中を見つめ扉を開けるのを見た。

——ガラッと勢いよく扉が開かれて葵が目を見開いた。

「あおい!」

「なっ…なんだ?」

目の前に息を切らす梓がいる、その目がじっと葵を見つめていると、

グ……と梓の腹の虫が鳴いた。

「腹減ったから迎えに来てやった！」

「はぁ！？先に食ってればいいだろ？家族団欒かつ！？」

額に手を当て呆れ返る葵に梓はお構い無しにニーツコリと笑っていた。

「あたばーよ！ほらほら行こうよー！俺を餓死させる気かぁ？」

葵の腕をグイグイと引っ張り梓は室内に残る部長を見ると相変わらずの笑顔を振り撒いた。

「……てか、なに、2人つきりだったのか？」

廊下を小走りに行く梓が迷惑そうにする葵を引っ張ったままチラッと見た。

「あー……まあな？」

「ボツ……」

「ボ？」

「ボーーー…イズ…ラブか？」

「なんだそれ…」

「知らないのか！？同性愛だ同性愛！」

叫ぶ声が廊下に響いた。

「いや…そうじゃなくてさ？」

「だよなあ〜！葵は物知りだもんなあ？でも、あの人、女の子みたいだな…男子の制服着てたけど…」

「勘だけはいい…」

「えっ？何か言った！？？」

「…まあ今の人となら考えてもいいかもな？」

「…………ええええっつ！！！？？？」

騒がしい声を出して梓は仰天する、葵は方耳を押さえた。

「うるっせえ〜…」

「でも、女子と2人つきりとかだったらどうしようかと思ったよ！」

「は？」

「だってほら、告白して泣かされるならまだしも、食われてポイっ
てのは頂けないだろ？」

「……お前さ、俺がそんな事すると思ってるの？」

「…えっ？」

「え、じゃねえよ」

葵は睨みながらわしゃわしゃと梓の頭を撫で回した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5597j/>

こいつとあいつと恋人理由

2010年10月11日17時40分発行